



卓 話



NO. 979 2008年2月7日
東京四谷ロータリークラブ

「書物の日米関係」

—書物の移動から見えてくるもの—

早稲田大学教育・総合科学准教授 和田 敦彦氏

現在、10万冊を越える日本語図書をもつ図書館が、アメリカ国内では20を越える。では、いったいいつから、どのようにしてこれらの図書はアメリカに渡っていったのだろうか。そして、その背景には、どのような問題がはらまれているのだろうか。これらを明らかにするために、2005年以来、アメリカ各地の図書館で取材、調査を行い、こうした日本語蔵書が生まれてくる歴史を追ってきた。



アメリカの図書館における日本語図書収集は、古くは1905年、当時イエール大学で教鞭をとっていた朝河貫一の活動にまでさかのぼることができる。ただ、その後の100年にわたって、どこの図書館が、どういう図書を購入してきたか、という単なる事実を調査してきたわけではない。ある書物がそこにある、或いはその場所に至るという背景には、複雑にからまりあった政治・経済的な歴史が潜んでいる。それを浮かび上がらせることが、この調査の目的だった。

具体的にいくつかの本をとりあげて、このことを説明してみたい。まずとりあげたいのは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）の所蔵する一冊の書物だ。

『子爵相馬孟胤閣下追悼録』（相馬郷友会、1936年）なる本だが、この本の裏表紙には、図書の貸し出し票と、所有者を示す蔵書印が押してある。蔵書印には「ツーリレーキ日本語図書館」とあり、貸し出し年月は1944年となっている。「ツーリレーキ」とはどこなのか、そして1944年という日米戦争の只中に、アメリカ国内のどこにこうした図書を貸し出しする場所があったのだろうか。いったいどういった人々が読んでいたのか。

日米開戦の後、1942年から、西海岸の日系人たちは中西部に強制移住させられ、日系人収容所に移される。実はこの本は、収容所のあった「ツールレイク」で、その収容所内で作られていた日本語図書館に収められていた本なのだ。戦後になってその本が日本語学校に寄贈され、そこから次にUCLAにたどりついたのである。

あるいはもう一冊の図書、これはデューク大学のアジア図書館に収められていた一冊で谷口吉彦『大東亜経済の理論』（千倉書房、1942年）。この本には陸軍大学校の蔵書印が見られる。いったい何故日本の陸軍大学校の蔵書が、ノースカロライナにある大学蔵書の中にあるだろう。これは、日本占領期に日本から連合国軍によって接收され、持ち出された本であり、その後アメリカの議会図書館を経て各地の大学に流れていった図書にあたる。

これらの図書は、ルートは違え、ともに戦争に巻き込まれ、国家や民族の対立、緊張の中で翻弄されてきた書物である。本が辿ってきたその複雑な道筋には、こうした国家間の歴史が刻み込まれている。そして書物を送り、或いは奪い、或いは提供するそれぞれの場面には、その理由が存在する。

こうした日本の書物の流れはまた、日本について、海外でどのような情報が、いつ、誰に求められていたのかを明らかにしてくれる。戦中には日米間の書物流通は途絶えたこともあり、日本では「洋書飢饉」という言葉が用いられ、逆にアメリカ国内でも日本の書物を手に入れることは難しくなる。しかし、戦後の緊密な日米関係は、米国内の各地大学の日本研究や日本図書館を急速に発展させることとなって行く。日米間の書物の流れは、日本に対する関心やイメージの変化、そして日米関係を色濃く反映しているといつて良い。

書物の流れが、単にそれにとどまらない多様な情報を含んでいること、そしてそのことが、日米関係史やその中で対立、摩擦や交流を考える上での重要な手がかりになって行くことを述べてきた。とはいえ、こうした書物の流れについての研究は、多くの難題を抱えている。特に大きな問題は、書物の流通や移動を示す史料自体があまり残されていないことにある。図書館は図書の保存や提供には関心を持つが、その本がいつ、どのようにそこに至ったのかを示す、自分達の文書にはあまり関心を持っていない。

このことは図書館ばかりではなく、公共機関・企業を含め、文書・歴史資料に対して十分な関心が払われていないという一般的な問題ともつながる。日々の業務に追われる中で、記録を残して行くこと、保管し、整理することの難しさがそこにある。長期的な目で自らの活動を捉え、考える為に、過去の資料が重要、かつ有用であるという認識を、少しでも広く共有してもらおうことも、今なお継続しているこの調査の一つの課題となっている。